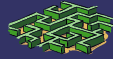


尊厳ある看取りケアを目指して
「ユニットケアだから出来た家族とのかわり」

社会福祉法人 大須賀苑
特別養護老人ホーム おおすか苑
横山礼子



社会福祉法人 大須賀苑
特別養護老人ホーム おおすか苑

概要

<法人基本理念>

利用者一人一人がその人らしく
自立した生活を営むことができるように支えることを目指す。

<事業内容>

従来型:平成4年5月開苑

定員50名

ユニット型:平成15年10月増設

定員30名



取り組んだ課題

R氏のことを尊重した
R氏らしい生活。

R氏は、入所前はつなぎ服を着、車椅子に拘束されて生活していた。家族からも怪我をするといけなからと、拘束の希望があった。
しかし、入所したその日から尿意を訴え、介助すれば自立できることがわかった。

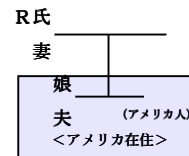
R氏紹介

■性別:男性 ■年齢:86歳 ■要介護度:3

■入所日:平成21年6月19日

■病歴:脳梗塞、糖尿病

■家族構成:



具体的な取り組み

- おむつをパンツに替え、トイレを使用する。
- 行動範囲を拡大。
- 食事の自力摂取の継続。
- 看取り期も最後まで生活リズムを継続する。

具体的な取り組み

■入所時おむつをパンツに替え、トイレを使用する。

→昼夜を問わず、R氏が尿意を訴えたらトイレに誘導し立位をとってもらい、トイレで排泄をする。R氏も排尿、排便の際はトイレに行くことが習慣化できた。但し、コールボタンを使わず居室ベッドより立ち上がり、車椅子に移乗してトイレまで行ったこともあった。

- ・頻回に防室する・居室の物音に注意を払う。
- ・居室入口カーテンに鈴を付け、動きを察知する。
- ・コールマットの使用。



具体的な取り組み

■行動範囲を拡大

- 車椅子を自走できるように
- ・毎日、足関節の運動を行った。

■食事の自力摂取の継続

- 箸を使用して食事ができるように
- ・タオルたたみ・洗濯ばさみの付け、はずしなどの手、指のリハビリ。



リハビリの習慣化

R氏自らリハビリを行う

取り組み後のR氏は…

- 穏やかな表情になる。
- 意思を言葉にする。
- 車椅子を自走してリハビリに行く。
- 食堂で皆と食事をする。
- 食器を手に持ち自力摂取する。

R氏の変化と家族の変化

意思を尊重した生活はR氏に変化をもたらした。

- 入所前の拘束生活の抑制が解かれ、表情が穏やかになる。
- 独特の表現で意思を表す言葉を発する。
「ノーサンキュー」「パッテン」「只今参上」

R氏の変化に家族も変化した。

- 書類の確認や日々の相談をR氏にするようになる。

当たり前前の夫婦の姿を取り戻す。

転倒、怪我を繰り返す

- ベッドから立ち上がる。
 - 車いすへ移乗する。
 - 歩いて移動しようとする。
- 転倒したり、壁に頭を打ち出血するなど、怪我を繰り返す。

その都度、家族と会い状況を伝えたり謝罪をすることでR氏の“人となり”がわかった。

R氏について気づいたこと

客商売をしていたために、家族には意思を伝えるが、他の人(R氏の中ではお客様)には遠慮する。

家族以外の方が面会に来ると、シャキッとしているが面会が終わると、熟睡したり疲れた表情をみせる。
家族以外の人に対しては気丈に振る舞う。

職員に対しても遠慮して自分で行動しようとする思いが残っている。

平成22年9月18日転倒し大腿骨骨折

転倒により大腿骨を骨折。対処方法が医師から3つ提示される。

- ①手術をする。
- ②安静にし、骨がくっつくのを待つ。
- ③そのままにし、いつも通りの生活を送る。

そのままにし、いつも通りの生活を送る

医師と相談し、手術をせず、安静にしていることもせず、これまでと同じ生活することを妻が希望。R氏の生活を尊重した「普段の生活」を送るケアを続けることになる。

- ・昼間の排尿、排泄の際はトイレに行く。
 - *職員2名で対応。
- ・手、指、足のリハビリを続ける。
- ・食事は食堂で他の入所者と一緒に食べる。
- ・「掛川花鳥園」へ遠足に行った。



R氏とのコミュニケーション

家族にはなれないけれど、遠慮なく思いを伝えていただけるよう、R氏との関係づくりに努める。

事あるごとに声かけし会話をしたり苑内散歩に出かけたり。夜間、不安そうな表情で閉眼している時にはベッド傍らで会話をするなど、積極的にR氏とのスキンシップに努める。

家族からの言葉

職員の取り組みを見て、アメリカ在住の娘夫婦（夫はアメリカ人）からいただいた言葉……

安心して任せられる。

日本の介護も捨てたものじゃない。

日々の介護に家族が参加する

職員と一緒に、家族もR氏の介護に携わるようになる

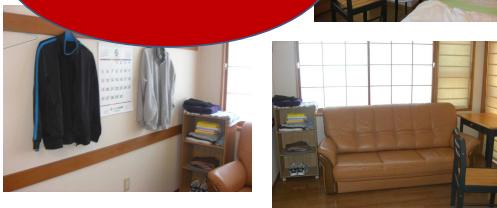
食事介護 清拭 散歩付添 リハビリ



家族がR氏と過ごす時間が長くなり
居室にいる時間が長くなる。

居室が「家庭」へと変化

R氏の居室がもう一つの「家」となる。



居室は「家族団らん」の場となる

編み物をする。仕事をする。食事をする。談笑する。R氏の居室が家族にとって普通の生活の場となる。



家族と職員がお互いの領域を侵さない、
信頼し合える時間と場の共有。

「看取り」への移行

平成23年2月9日、既に手の施しようがない

「腎不全」との診断が医師から告げられる。

当初、奥様は困惑していたが、日々R氏の状態が悪くなる様子を見て「看取り」の事実を受け入れるようになる。

「輸血など父に痛い思いをさせる気はありません。入所した時から最後はおおすか苑で…という気持ちは今も変わりません」(娘)

穏やかな時間の経過

看取り

家族も職員も緊張した日々、時間を送ることになる。



R氏のケアにあたり、家族と職員が信頼し合えた結果、緊張というより、家族に囲まれた日々を過ごしたR氏にとっても“穏やかな”時間をともに送ることができたのではないかと感じる。

入所時から貫いたケア



これまで通りの生活を送る。

R氏の意思を尊重したR氏らしい生活。

利用者一人一人が

その人らしく

自立した生活を営むことができるように

支えることを目指す。

